太　宰　府　史　跡

昭和46年度発掘調査略報

昭和47年5月

九州歴史資料館

7
8
11
15
9
6
1
4
2
16
5
13
17
14
太宰府町
昭和43年度
昭和44年度
昭和45年度
昭和46年度
0
100
200m

昭和４６年度の発掘調査の概要

調査の経過

昭和４６年５月１３．１４日の両日に開催された太宰府史跡発掘調査指導委員会議で昭和４６年度の発掘調査の計画が協議され、次の５地点が調査予定地として決定された。

	調査地区	期間	面積 単位(m²)	
1	学校院跡	4月1日～5月20日	1,000	昨年度調査の継続
	〃	11月1日～12月20日	800	
2	政庁跡	1月10日～3月31日	1,000	
	〃	5月20日～8月30日	1,000	
3	観世音寺跡（僧坊推定地）	9月1日～10月31日	1,000	
4	緊急に調査を要する箇所			

昭和４６年度の調査は上記の調査計画に基づき調査を進行した。昭和４５年度より継続調査中であつた学校院跡についてはこれを終了し、政庁地区では現在も継続して調査を進めている。昭和４４年度より調査予定地である観世音寺僧房址の調査については予想以上の緊急を要する地区の増加のため本年も計画を変更し、見送らざるを得なかつた。また、緊急を要する地区の調査として７ケ所の発掘調査を行つた。更に太宰府関連遺跡の調査として大野城の土塁及び礎石群の測量・実測を３ケ所において行つた。その一つは大野城を限る百間石垣の西方にある通称「屯水」地点の林道新設に伴なう工事で、土塁の一部が切断されるため地形測量を行つた。また林道拡幅工事に伴つて、太宰府口城門の北「尾花」地区において倉庫建物２棟の実測と土塁の発掘調査を行つた。

４６年度発掘調査地区は下記の通りである。

昭和４６年度調査地区

調査次数	調査地区	面積	期間
第９次	６ＺＧＫ－Ｃ（学校院地区）	925	1971. 2. 1～1971. 8. 12
１０	国分寺西地区	70	1971. 4. 10～1971. 4. 30
１１	山ノ井地区	80	1971. 6. 16～1971. 6. 26
１２	向佐野地区	492	1971. 7. 5～1971. 8. 16
１３	〃	492	1971. 8. 16～1971. 9. 22
１４	６ＡＹＭ（大楠地区）	333	1971. 8. 20～1971. 9. 30
１５	６ＡＹＴ－Ｆ（正殿東地区）	988	1971. 9. 17～
１６	６ＫＫＺ－Ｍ（観世音寺）	21	1971. 11. 25～1971. 12. 14
１７	６ＡＹＭ（不丁地区）	477	1971. 1. 12～1971. 3. 25
	大野城（屯水）	4200	1971. 5. 17～1971. 5. 21
	〃（尾花）	4000	1971. 8. 19～1971. 10.
	崇福寺	890	1971. 12. 9～1972. 2. 16
	女山神護石	8400	1971. 7. 1～1971. 7. 7

※ 大野城．女山神護石は地形測量面積

第９次調査（学校院地区）

(I) 検出遺構

学校院跡は政庁と観世音寺の間にあつて方２町を占める地域をもつて、その跡に推定されている。

学校院跡の発掘調査は今回がはじめてであり、また学校院の存在を裏ずける礎石等の痕跡も確認されておらず、その占める範囲についても、未だ詳らかでない。今回調査した地域は、この方２町と推定される地域の東辺に推定される。この地

は従来水田であり、これを境にして南側と西側の水田より約２ｍ程高く、一種の台地状を呈している。以前この付近より文様塼が出土した伝えがあり、かつ、観世音寺文書に見える治安元年（１０２１）から約半世紀近くにわたつての学校院と観世音寺との境界争いの記事は、今回の調査地域が、観世音寺域を方３町と推定した場合、その西の境界にあたると考えられる地点である。従つて遺構の存在が十分に予想され、また条坊復元の上からも大きな期待をよせた。

調査の結果、調査地域の西北隅において、南北に長い、掘立柱建物を１棟検出した。また東半部において、南北に走る溝５条を検出した。その他、今調査では予想しなかつた井戸１２基を検出した。以下その概略を述べる。

(a)　掘立柱建物

梁行２間、桁行７間の南北棟の建物であり、梁行、桁行ともに柱間は７尺で切妻造りの建物であろう。この建物の時期については柱穴中からの遺物出土が少なく、明確ではないが、この建物の柱穴の一部を切り込んで井戸が造られており、この井戸の形式と出土遺物より、これ以前の建物と考えられ、平安時代後半期を下るものではなかろう。従つて、この建物は予想される学校院建物群の東限の一建物であると考えられる。

(b)　南北溝

発掘区の東半郡（観世音寺より）で南北方向の溝を５条検出した。西寄りの２条は幅１ｍ、深さ0.６ｍの小さな溝であり、発掘区域のほぼ中央で消滅している。中央の溝は幅２ｍ深さ0.６ｍであり、この一部が井戸掘方により切られており、井戸の出土遺物よりこの溝の廃絶期を鎌倉期と推定できる。東寄りの２条は本来１条の溝とも考えられるが、ほぼ中央に護岸のための杭列があり、また人頭大の栗石が認められるところから、別々の溝であろう。これらの溝と観世音寺文書との関連が予想されるが、今後の検討が必要であろう。

(c)　井　戸

今回の調査において特に顕著な遺構として井戸がある。検出した井戸は１２基で時期的には、平安時代後半期から鎌倉期にかけてのものである。これらの

井戸を形態的にみると方形プランと円形プランに分類される。

方形プランの井戸には底に曲物を据えており、出土遺物から、その時期を平安時代の後半期におくことができる。つぎに、円形プランのものは、桶側を数段かさねたものと曲物をかさねたものがある。円形プランをもつ井戸は出土遺物から鎌倉期におくことができる。

今回検出した井戸においては方形プランから円形プランへという変遷を考えることができる。

発見井戸一覧表

遺構番号	掘り方探度(m)	平面形態	板材形態	曲　物	時　期
SE 220	1.3	円　形	桶　側		鎌倉前半
SE 225	2.0	方　形	縦　板	○	平安後半
SE 230	1.6	方　形	横　板	○	平安後半
SE 235	4.1	円　形	桶　側		鎌倉
SE 240	3.8	円　形	〃		鎌倉
SE 245	1.6	方　形		○	平安後半
SE 250	1.35	方　形	縦　板		平安後半
SE 255		円　形	桶　側		
SE 260	1.3	円　形		○	鎌倉カ
SE 265	1.7	円　形	桶　側		鎌倉後半
SE 270	1.9	円　形			
SE 285	2.9	円　形	桶　側	小形桶側	鎌倉

(Ⅲ) 発見遺物

遺物は主として、井戸と南北溝中からまとまつて出土した。

(a) 井戸発見土器

井戸から出土した土器として、最もその量が多く、かつ普遍的にみられ

るのは、土師器の坏および皿の類である。これらの土器は、手法的にみると、ヘラ切り離しによるものと糸切り離しによるものがあり、この種の土器の相対的編年への良好な資料を得た。

(b) 南北溝発見土器

南北溝から発見した土器は、量的には土師器が圧倒的に多く、青．白磁．中世陶器がこれに次ぎ、その他に瓦質土器がある。

土師器では，井戸発見と同種の坏、皿の類が大部分を占める。これらの土器の共伴関係より、今回検出した5条の溝は東に寄つた溝ほど新しくなる傾向がある。

(c) 瓦

今回の調査で出土した軒瓦は74個である。これらは主に南北溝および井戸から出土した。軒丸瓦では巴文のものが多く、その大半は古式のものである。軒平瓦では老司I式と呼ばれている扁行唐草文のものが多くついで鎌倉時代の剣頭文のものが多い。また文字瓦としては「佐」「平井」「賀茂瓦」「観世音寺」「筑」等がある。このほか鬼瓦、面戸瓦、熨斗瓦が数点出土している。なお伝学校院出土として現在太宰府天満宮に収蔵されている文様塼があるが、これとは若干文様を異にするものが5点出土している。

第10次調査（国分寺地区）

(I) 検出遺構

住宅建築にともなう緊急調査で約70㎡について調査した。調査地域は、金堂跡に比定される現在の庫裏の西約30mの所である。以前南北方向に基壇様の高まりが走つており、回廊跡に比定されたところであつたが、調査時には既にこの高まりはみられず、調査の結果も、礫群、溝等を検出したが、時期、性格については不明で、国分寺関係の遺構と考えられるものは検出できなかつた。

(II) 発見遺物

本調査で発見した遺物は土師器、青・白磁、石釜と多量の瓦類である。

(a) 土　器

出土量は少量で器形も坏および皿の類で、底部に糸切り痕を有する。青．白磁、石釜1点づつを検出した。

(b) 瓦

発見したものは　保存が悪く、軒丸瓦1点を発見した他は全て、丸。平瓦である。叩打文の種類として、縄目文と斜格子文に分類できる。

第11次調査（山ノ井地区）

(I) 検出遺構

現状変更にともなう事前調査で約80㎡について行つた。調査地域は、観世音寺の北方の千代岳と山ノ井に狭まれた谷あいの水田で、政庁中軸線より約617m東へいつた地点である。今回の調査は観世音寺の背面を解明する手掛りとして期待された。

調査の結果、幅4.5m深さ0.6m　の東西に走る溝1条とその南側で柱穴多数を検出した。この溝と柱穴群は出土遺物から鎌倉期後半から室町期前半のものと考えられるものであり、また位置的に古代観世音寺との直接の関連は見出せなかつた。しかしながら今後の隣接地の発掘調査によつて中世観世音寺の背面を解明する上で重要な遺構となろう。

(II) 発見遺物

今回の調査で発見した遺物は、土器と少量の瓦である。出土状態は溝から発見したものが大部分であり、その他に南側の柱穴群から少量の土器を検出した。多くは少片であるが、多種にわたつている。坏、皿、土鍋、摺鉢、火鉢、鉢、土釜、青．白磁の椀および皿それに滑石製釜等である。坏と皿は土師質のもので、底部に糸切り痕を有する。学校院址出土のものより新しい火鉢、鉢および土釜は瓦質のもので、火鉢には菊花文のスタンプがある。巴文軒丸瓦は少片であるが今回の調査では唯一の軒瓦である。これらはいずれも鎌倉期後半から室町期前半のものと考えられる。

第１２次調査、第１３次調査（西郭限の調査）

(I) 検出遺構

水城西小学校および県立公害センター建設にともなう事前調査である。

調査地域は、政庁中軸線より西へ約1.3 Km の地点で、御笠川と佐野川の間のほぼ平担な水田である。調査は条坊の西を画する道路とそれに付随する溝の検出を目的とした。調査の手掛りとして、現在、ほぼ１２坊想定位置に南北方向の道路があり、これが条坊の西を画するものと予測された。

調査の結果、第１３次調査において、西郭限の推定線上で南北溝を検出し、これにあたるものと考えられたが、途中で西に折れ曲がり、かつ出土遺物から中世の溝であり、条坊の西郭限に比定し得る遺構と考えるには至らなかつた。

(II) 発見遺物

今回の調査で発見した遺物はごく少量で、南北溝で土師質の坏と火鉢を発見した。

第１４次調査（大楠地区）

(I) 検出遺構

調査地域は東西に走る県道吉木一関屋線をはさんで蔵司の南方に位置し、政庁中軸線から西へ2町（２１６ｍ）の地点にある。この地に接して東側は約２ｍほど高くなり、後述する第１７次調査地点である。

調査の結果、南北方向の溝２条を検出した。そのうちの一つは大溝で、幅１３ｍ深さ約２ｍで、東岸には木杭による護岸施設が行われていた。この溝の西約１８ｍに、幅約1.5ｍ、深さ0.5ｍの小溝がある。この小溝は政庁中軸線から西へ216ｍに位置し、右郭の二坊と三坊を画する線に一致している。

(II) 発見遺物

今回発見した遺物は大部分が溝から発見したものであり、土器、瓦を主として発見し、その量もかなりの点数にのぼる。その他に木器を数点発見した。

特にこの溝より５点の木簡を発見した事は今回の調査の大きな成果であつた。

(a) 土　器

発見した土器は須恵器および土師器であり器種は、高台付の坏、椀、皿および甕類である。発見土器より、溝の時期を考えると、最上層は平安時代後半期、最下層のものは奈良時代後半から平安時代初頭のものである。従つてこの溝は、奈良時代終り頃から平安時代を通じて存在していたと考えられる。

(b) 木　簡

発見した木簡は5点であり、1点は習書で「正月月……。」「頓首……。」等の文字が判読できる。他の4点は断片であり、わずかに墨痕を認めるのみである。

(c) 瓦

かなりの量を発見し、時期的には、奈良時代から平安時代のものである。

第15次調査（正殿東地区）

(I) 検出遺構

正殿に接続する回廊部分の調査を行なつた。この調査は現在も継続中で、これまで上層遺構の回廊及び築地を検出した。

検出した回廊は正殿に接続する北面回廊およびこれに直交して南へのびる東面回廊、これに接続して北へ延る東面築地である。

礎石の遺存状態は極めて良く、1個を欠くのみで、他は全て残存していた。礎石の心々距離は梁行、桁行ともに3.9 mで、第1次、第6次調査結果と一致する。北面回廊の北側柱列の中央3間分の各礎石間には塼を2列に敷き並べた遺構が検出されたが、その中心線は礎石の中心線より約35 cm ほど北へずれており、古い時期のものと思われる。基壇側石は北側で栗石を一段分検出した。南側では2～3個を残すのみで、ほとんど破壊されているが、丸瓦、塼によつて部分的に補修されている。調査地域東北隅で北にのびる築地を検出したが、小範囲であるため具体的には明確ではないが、これまで不明であつた正殿背後をとり囲む施設は築地であることが判明した。

(Ⅲ) 発見遺物

今回発見した遺物は上層遺構のもので、土器、瓦、および木器を検出した。今回は土器の出土は少なく、瓦が大部分である。時期は平安時代後半期にあたるものである。木器として東面回廊の東側溝中より漆器の杯蓋を1点検出した。

第16次調査(観世音寺地区)

(Ⅰ) 検出遺構

車庫建設にともなう現状変更である。調査地域は観世音寺の寺域内にあたり、現在の参道(観世音寺推定中軸線)の西に接する地点であり、何らかの遺構の存在が予測された。

調査の結果、観世音寺推定中軸線より約7.6m西へいつた地点で南北の溝を検出した。この南北溝は幅0.7～0.8mで、護岸として人頭大の石を積んでいる。この溝の性格については、調査地区が小範囲で明らかにできない。また出土遺物から、古代観世音寺に関連するものではなく、中世の遺構である。また、この溝の西の部分には、酸化鉄の堆積がみられ、鉄鋌、フイゴの羽口が発見されたことから、付近に鍛冶関係の遺構の存在が考えられた。

(Ⅲ) 発見遺物

発見した遺物は、土師器の坏、皿および青・白磁、瓦質土器、瓦類である。土師器の坏、皿は全て糸切り痕を有するもので鎌倉後半期におくことができる。出土遺物より南北溝は鎌倉後半期～室町期に廃絶したものと考えられる。

第17次調査(不丁地区)

(Ⅰ) 検出遺構

住宅建設にともなう事前調査である。調査地域は先に調査した第14次調査によつて明確となつた南北溝の東に隣接する台地状を呈する地点である。この地は字名を「不丁」と呼び、瓦片等が多量に散布しており、以前より、政庁と関連する遺構の存在が予測されていた。調査の結果、礎石使用の南北棟1を検出した。

また発掘区西半部において多数のピット群とそれより古い土拡１を検出した。

(a)　南北棟建物

検出した建物は礎石を使用したものであるが、残存していた礎石は２個であり、他は全て抜き取られていた。この建物は梁行２間であり、桁行については７間分を検出した。今回の調査では南側の妻部分が後世の排水用溝によつて削平されていたため検出されなかつたが、旧地形より考えて、桁行７間の建物として大きな誤りはないであろう。

柱間の心々距離は梁行、桁行ともに１０尺である。この建物の時期については根石中より出土した遺物より奈良後半期に位置づけられよう。またこの建物の東側で瓦溜りを検出したが、これは平安期に作られたものであり、建物内で検出したピット群と同時期のものと考えられる。

(b)　西半部遺構

発掘区西半部で直径２０～３０ cm のピット群を検出したが、これらと南北棟建物の関係については明確でない。また、西端部検出の土拡はこのピット群より古い時期のもので、これより完形の須恵器の壷と平瓶３６個を発見した。これは７世紀後半と考えられるものである。

九州歴史資料館蔵書